

日本のサブカルチャーに触れる 2.0

日本映画に見るロボットアニメ映画の現在とこれから

英語英文学科4年 神成 有己

前回僕は、日本のサブカルチャーについて語った。その上で、僕はトピックとして「痛車」というものを取り上げた。そして、僕の中でサブカルチャーに触れるのはそれで最後にしようと思っていた。なぜならば、前回の中でも語ったように文化を語るというのは非常に骨が折れる作業である。それは既存の日本の伝統的な文化を語る上でもそうであるように、常に新しいものが生まれ続けているサブカルチャーというものをとり上げていくことはさらに骨が折れるものであったからだ。事実、「痛車」一つのトピックを取り上げても、関連とされるものはとても多く、その情報量をいかにカットし、つなげていくのかそれがとても難しい作業であったからだ。だが、それは前回の記事を終えた直後では、違うものに変っていた。作業がキツイというのは確かだったが、結果として僕はも

う一度「サブカルチャー」をテーマにしてみようと思った。理由は若い人たちによって形成されていくこの文化的な動きを検証することで僕自身がその魅力に惹かれていったのがもう一度取り組んでみようと思つた経緯である。

今回はより大きなジャンル（一端）として、「ロボットアニメ」というものを取り上げてみようと思つた。なぜ、このトピックにしたのかというと、それは2008年末〜2009年にかけての邦画の中に僕が違和感を持ったのが始まりだった。というのも、2008年末〜2009年終盤まで、まるで狙ったかのように「ロボット」に関する映画例年に比べて多いというものである。洋画にしても「ターミネーター」、「トランスフォーマー」というビジュアルタイトルが並びそれらのどちらもやはりロボットに関係するものであった。日本、邦画ではどうかとい

うと実写での動きは少ない。しかし、日本映画には世界に誇れるジャンルがある。それが「アニメーション」というジャンルである。日本は実写という部分ではなく、「アニメーション」という舞台で「ロボット」映画を展開させていたのである。結果として2008年末に公開された「天元突破グレンラガン 螺旋篇」を皮切りに、「エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい」、「エヴァンゲリオン 新劇場版…破」、そして2009年末に公開された「劇場版 マクロスF〜イツワリノウタヒメ〜」の4作品が公開された。4作品というとあまり多いと思われないかもしれないが、いずれも新旧日本アニメーション、ロボットアニメというジャンルから見てもビジュアルタイトルの作品群である。そしてそれらが邦画内で期を狙ったかのように次々と作品を公開させていったのである。だが、こ

れだけでは別段取り上げなくてもよいと思われる筈である。僕がこの作品群に興味を持ったのは、もちろんさらにこの作品群には共通したものが「ジャンル」以外にも存在しているからである。それは、何かといえ、その制作方法にある。まず一つの共通点として、いずれもテレビアニメーションから人気を博し結果、テレビという枠組みを超えて劇場版化されたものがあるということである。そして、それは特に「エヴァンゲリオン」から端を発するものであるということだ。それが「再構成・再構築」というキーワードである。この作品群は、この手法を使い、作品に新たな息吹を吹き込むことに成功した作品たちなのである。

今回のこの記事では、この4作品を使って、「ロボットアニメ」のこれからを自分なりに考えていこうと思っている。構成としては、まずまったくこの作品を知らない人たちにもわかりやすいように簡単な解説を交えた後、それらがテレビシリーズでどのような結末を迎えたのかを記す。次に、重要にして今回のこの4作品をつなぐキーワードである「再構成・再構築」とは一体いかなるものであるのかについて述べる。そしてその制作スタイルを受けてこの4作品はどのようなものになったのかを述べ、その上で製

作スタッフがどのような狙い、思惑を持って制作に臨んだか、あるいは制作を続けているのかを雑誌のインタビュアーを交えながら考察していきたいと思う。そして「ロボットアニメの未来、これから」を自分なりにまとめていく。

では、その前に「サブカルチャー」の定義について再確認をしたいと思う。サブカルチャーとは、社会の正当的、伝統的な文化に対してその社会の一部を担い手とする文化、いわゆる大衆文化、都市文化、若者文化などもサブカルチャーと称する。つまり、社会の支配的な文化から逸脱した文化現象を指す。さらに日本ではこれにプラスアルファとして、娯楽を主体とするマイナーな趣味的文化もサブカルチャーとみなされる。以上がサブカルチャーの定義である。さらに、日本ではこれに漫画、アニメ、コンピュータゲーム、特撮作品、フィギュアといったオタク文化を総称して「サブカルチャー」と称している事が多い。ここで扱うものも後者の意味合いとしてとらえてもらって構わない。では、これからサブカルチャーの一端に触れていこうと思う。

ここで、一つだけ留意してもらいたいことがある。この記事には4作品の劇場版の内容に触れてしまう部分もある。またこの作品にはまだ

DVD化されていないものもあるためネタバレ（※1）となるような表記の仕方をしてしまうかもしれない。こちらもなるべく重要な部分は伏せつつ述べていくつもりだが、仮に触れてしまった場合はご了承願いたいという事を頭の隅にとどめておいてほしい。

※

「作品の解説 テレビシリーズの結末」

はじめに、この4作品をまったく知らないのに「ロボットアニメ」を語るのも忍びないと思うので、4作品の一つ一つの解説とテレビシリーズにおける結末について簡単に述べていきたいと思う。作品の紹介順については2000映画の公開順に則っていこうと思う。

・「天元突破 グレンラガン」……2007年4月から9月まで全27話、2部2編構成で公開された。本作は制作会社のGAINAX単独の初テレビアニメーション。タイトルの「天元」とは、万物の生育の根源、囲碁でいえば、盤の中央の事をさす。脚本家によるテーマとしては、「進化と宇宙での象徴ある螺旋」である。そのテーマとタイトルのように、主人公ロボットの武器も「ドリル」という原始的な武器を採用しており、作品も「ドリル」で一本の道を作り上げていくようにとてもエネルギーッシュな作品で

ある。同年には文化庁メディア芸術祭でアニメーション部門優秀賞を飾るなど受賞歴をいくつか持っている。

〔結末〕……この作品において人類は当初地上ではなく、地下に住んでいるという設定であった。それが何故なのかという本当の理由が分かり、その原因であるアンチ・スパイラルという敵との一騎打ちになる。結果として、主人公「シモン」が勝利を収める。その後の的に囚われていた自分の恋人「ニア」を取り戻すも、彼女はアンチ・スパイラルに生み出された生命体であり、シモンと婚約を交わしこの世を去ってしまう。そしてシモンはそれを見届けた後、未来を仲間達に託し姿を消す。

【人気を博した理由】この作品はその分かりやすい展開と主人公達の持つ努力と根性で困難を乗り越切ってしまう姿が好感を呼び沢山のファンを生んだ。また第一部でシモンの兄貴的存在である「カミナ」の壮絶死とその死を乗り越えていくシモンの姿も感動を与えた。そして放送終了後に映画化の告知をする事になった。

・「交響詩篇エウレカセブン」……………2005年4月～2006年4月までTBS系列で日曜（地域差あり）午前7時（タイトルのセブンの由来はここから）から放送された。全50話。製

作会社はボンズ。主人公「レントン」がヒロイン「エウレカ」と出会い恋に落ち、彼女が所属しているゲッコースタイトのメンバーとなり、その中で成長していくボーイ・ミーツ・ガールを主軸とした物語。海外での評価も高く、Eureka sevenというタイトルで放送されていた。第5回東京国際アニメフェアにてテレビ部門優秀作品賞などの受賞歴もある。

〔結末〕……………この物語のキーワードになってくる「スカブ・コーラル」とは何かという事が明らかになり、それを巡る人間の醜い争いへと発展していく。エウレカの謎にも触れられるようになり数々あった伏線も回収された。そして、世界を救うために動いたレントンとエウレカは世界を救ったあと、行方不明になる。彼等は生きていくという含みのある終わり方で物語は幕を閉じた。

【人気を博した理由】他作品の台詞や場面を部分的模倣だけでなく大胆に構成に盛り込んだ。テクノ音楽に対するオマージュや、「リフ」と呼ばれる空中サーフィンがあるなど多くの若者文化にサブカルチャーを内包した作品であった為、サブカルチャーが好きな人間などのコアなファン層に受け入れられたのも人気の要因のひとつであろう。

・「新世紀エヴァンゲリオン」……………1994年10月～1995年3月まで放送された。全26話。舞台設定は2015年と近未来である。15年前に起こった大災害「セカンドインパクト」により、人口の半分が失われた世界。人類は使徒と呼ばれる脅威に見舞われていた。主人公、碓シンジは使徒迎撃の為、特務機関ネルフに呼び出され、総司令である父親からエヴァンゲリオンに乗るように命令される。そして彼は世界の命運をかけた状況に追い込まれ、彼の心と精神は次第に傷ついてゆく。

〔結末〕……………24話まではエヴァンゲリオンを操縦するというロボット物であったのに対して、25話と続く最終話は「サードインパクト」や「人類補完計画」というエヴァの作品にとって重要な現象、あるいは計画が発動されたという暗示がなされたのみで、基本的には主人公、碓シンジや登場人物たちの精神的なものに焦点が当てられて、外面的な世界というよりは内面世界のみが描かれていく、今までのストーリーと断絶したものになった。そして自分の存在意義を見つけたシンジは「ここにいてもいいんだ」と叫び、登場人物たちに祝福されて幕を閉じる。また多くのファンの声に応じてか、97年春に、『DEATH&REBIRTH』（※）という絵集編を、

テレビ版の25話と最終話を完全新作という形で作り上げた『THE END OF EVANGELION Air/まじろを、君に』（以下総称として旧劇場版とする）を同年夏に公開という形でエンディングを迎えた。

【人気を博した理由】……一番に挙げられるのは、この作品が持つミステリアスな雰囲気ではないだろうか。先にも挙げたように「人類補完計画」という謎の計画がある。またネルフという特務機関の存在意義の不透明さ。所々に見られる神話や心理学、哲学、宗教関係の専門用語など多くの伏線を残しているという所だ。当時もそのような専門用語を多用した作りにSFファンを中心に爆発的に人気を呼び、現在もその存在を維持し続けている。

・「マクロスF」……2008年4月～2008年9月までMBS・TBS系列で放送された。全25話。「マクロスシリーズ」生誕25周年記念作品であり、テレビ版マクロスとしては13年ぶり、第3作目にあたる。西暦2059年の長距離移民船団「マクロス・フロンティア」に住む少年早乙女アルトを中心として起こる、恋と複雑に絡み合う陰謀と戦争の物語である。

【結末】……「マクロスシリーズ」の伝統である主要男女による三角関係と「ヴァジユラ」

と呼ばれる宇宙生命体とその力を利用する黒幕の陰謀が複雑に絡み合いながら物語はフィナーレへと向かっていく。「ランカ」と「シェリル」の二人の歌姫からシリーズ伝統の「歌」の力を借りて、アルトは「ヴァジユラ」の力を利用して敵との最終決着をつける。その後ランカとシェリルはアルトに対する気持ちをお互いに再認識し、恋と歌の「ライバル」として認識をするも、アルトはどちらも選ぶのかよく分からないまま物語は幕を閉じた。

【人気を博した理由】……マクロス25周年記念作品として、今までのマクロスシリーズのオマージュが散りばめられていた為、長年のファンも楽しめるものになった。また新規ファンの獲得として一番大きかったのは「歌」である。1980年代のアイドル風のランカ（※3）と現代の洋楽ディーヴァのシェリル（※4）のダブルヒロインが織り成す主題歌・挿入歌のシングルやサントラは、ともにチャート5位以内を獲得。また武道館でのライブ成功など「歌」によって多くのファンを獲得した。また先に述べた三角関係にも注目し及び、多くの男性・女性ファンからはどっちつかずのアルトに対して（特に最終回）非難する多くの声が寄せられた。

※

「新たな可能性を生む手法

——再構成・再構築とはなにか——

以上で、作品群に対する簡単な説明とその結末、並びにその作品たちが何故人気を博したのかという理由も述べた。これでいささかではあるが、これから取り上げてゆく作品の内容や、人気の度合いが分かるのではないだろうか。また、これらの共通点などもおぼろげながら見えてくれれば幸いである（ボーイ・ミーツ・ガール物が多いなど）。さて、次の部分からは、これらが「テレビアニメ」から「劇場版アニメ」として生まれ変わった最大の要因である「再構成・再構築」について説明していきたいと思う。そもそもこの「再構成・再構築」とは何であろうか。「再構成」と聞いて多くの方は「リメイク」というものを思いつくのではないだろうか。その考え方は概ね正解である。「再構成」とは、「再び組み立てる」事である。つまり、ドラマの総集編に見られるように「既存のフィルム」を生かして一つのフィルムに全てのものを詰め込み、余力があれば新規に制作したフィルムとあわせることでひとつのみに作り直す事である。多くのテレビアニメが劇場版になる際にはこの「再構成」というものが多い。「既存のフィルム」を切り貼りし、新規カットを加

えたり、加筆修正をして劇場用に焼きなおしたり、終了した脚本を練り直して作画から始めるというスタイルなど多くの「再構成」＝「リメイク」という形を取ってきた。先にあげたエヴァンゲリオンの旧劇場版は正に「再構成」に近い。エヴァンゲリオンの1話から24話までを上映時間約70分に全てを入れる。それは正に既存フィルムを切り貼りし、また新規カットを入れ「再構成」する事で「DEATH」という作品を作り上げた。また、25話、最終話に関しては、語られる事がなかった「サードインパクト」の全容と「人類補完計画」について劇場版で述べた事で、同じ内容でありながら全く違う結末を作り上げた。これもまた「再構成」と言われるものとして考えられるだろう。

では、「再構築」とはなんであろうか。まず、この「再構成」ではない、「再構築」という言葉を最初に使ったのは誰であろうか。それは新世紀エヴァンゲリオンの監督である、「庵野秀明」監督である。彼は97年にエヴァを完結させてから実写映画を数本撮ったりするもアニメ作品の監督をする事はしなかった。その為、多くのファンの中で「庵野監督はもうアニメに手を出す事はしないだろう」という憶測も飛んでいた。しかし2006年9月に突然声明を発表

した。見出しには大きく「我々は再び何を作るのか」であった。その中に庵野監督の本音とも取れるべき言葉が多く記されていた。そしてその中で彼は新しいエヴァンゲリオンの形として「リビルド」＝「再構築」をするのだと記されていた。これを読んだ時、一人のファンとして僕は「これはただの焼き直しに他ならない」と考えていた。その当時、Zガンダムが総集編として「リメイク」されていた。それは古い映像に現代の作画が混じり展開もテレビシリーズと少し違った程度であった。きつと「リメイク」という使い古された言葉を嫌った監督の造語であろうとその当時の僕は考えており、「リメイク」も「リビルド」も大した違いはないのだと感じていた。しかし、その後トレーラー（予告映像）が出る度に僕は多くの衝撃を受けることになった。それはなにもかもが新規に書き下ろされた映像であった。一度見た事のある場面も作画が綺麗になったとか既存のフィルムをリマスターするのではなく今のアニメ製作における技術を詰め込み、既存の映像を一切使わない全く新しい映像世界を作り上げていたのである。当時出来なかったCGの多様や、より緻密さを含んだ作画。庵野監督が提示した「再構築」の一端が垣間見えた瞬間であった。

ここまで、読んでいただければもう「再構築」というものがどういうものか分かるだろう。つまり、全ての見直しである。一度完結した物語を製作陣は新たな可能性がないかを求め、そして新たな命を吹き込ませる。再構築と再構成の大きな違いはそこである。例えば、「桃太郎」のドラマがあったとしよう。桃太郎は童話でありとても短いストーリーだ。だが、ドラマにするために犬を代表とする仲間との出会いを綿密に書いたり、心情表現をふんだんに入れたし、大元は原作通りのドラマにしたとする。では、この桃太郎のドラマが出て映画化が決まった際、「再構成」という手法であればどうなるであろうか。きつと、時間の都合で原作のように桃太郎と犬や猿、キジとの出会いを簡潔に済ませ、鬼が島へすぐ向かう。鬼を倒して財宝を村へ持ち帰り完結だが、それだと不十分だから少しエンディングに何かを加えようと製作陣が思えば、村で幸せに暮らす桃太郎とおじいさん、おばあさんそして鬼が島へ行った仲間たちが映し出されて終わるだろう。これが「再構成」のやり方である。では、これを「再構築」という形にしたらどうなるのであろうか。これは「桃太郎」のドラマの展開や人物の立ち位置など全ての変更がここから始まる。そして原作の存在

をどうするかもココで決まる。つまり、物語のベースはあるようにみえて実は何もないに等しい。これが「再構築」である。もしかすれば、犬は「再構築」では役割が変えられ途中で桃太郎を庇って死んでしまうかもしれないし、そもそも仲間ですらないのかもしれない。「桃太郎」を知っている人達ですら「再構築」ではどのような展開が待っているのか想像もできないのである。

新世紀エヴァンゲリオンは2006年のこの庵野監督の声明が発表されてから1年後2007年9月1日に「エヴァンゲリオン 新劇場版序 EVANGELION:1.0 YOU ARE (NOT) ALONE」(以下「序」という題名で公開された。タイトルから「新世紀」の文字が消えた。タイトトルから「新世紀」の文字が消えた。製作陣は「21世紀になって新世紀もクソもないでしょ」というようなコメントを語っていたが、今思えばそれが過去の「新世紀エヴァンゲリオン」との決別を意味していたのではないかと考えられる。そして、この動きに呼応してか2006年のエヴァンゲリオン以降、リメイクではない再構成、あるいは再構築と呼ばれる新たな手法を取り入れての作品の映画化が次々に決まってゆく。そして2009年。「再構成・再構築」を取り入れた作品群が先に述べてきた4作

品なのである。

※

「再構成・再構築をうけての作品の変化」

これら4作品は「再構成・再構築」を経てどのように生まれ変わっていったのか。僕の主観もあわせて紹介していこうと思う。また、インタビュアーや僕が特に重要なのではないかと思われるキーワードは太字になっているので、そこは制作陣のこだわりや、作品を「再構成・再構築」する際の心情と想っていただけなら幸いである。まず2009年4月に2作品が公開された。それが、「劇場版 天元突破グレンラガン 螺旋篇」と「劇場版 交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい」である。

はじめに、「劇場版 天元突破グレンラガン 螺旋篇」から述べて生きたいと思う。2008年9月に前篇にあたる「紅蓮篇」が公開され、2009年4月に約半年間隔を開けて公開されたことになる。先の紹介で述べたようにテレビ版では4部構成にしたものを2編にわけ、前篇で「1部から2部」を。後篇で「3部から4部」という本来の構想していたイメージに近づけた形で作られた。製作的には「再構成」に近い。パンフレットにおいては「再編集」という風に称されている。では、今までのような総集編な

のかといえ、それは前篇にあたる「紅蓮篇」から物語の様相は変わっていた。ひとつには全体的なストーリー速度を極限まで濃縮し、加速させた事にある。思い入れ深いシーンや重要なエッセンスはそのままに可能な限り余分と思われる部分の削除を行った。また映画にする際の細かい色彩設定などの見直しも勿論行われた。アフレコも再び行う事でシーンの長回しを避けるなど多くの見直しと修正が施された。特に変化が激しいのは全編を通して「ラスト」の大きな改編を行ったという事と、中心人物が誰であるかを明白にした事である。まず「ラスト」の大きな改編に関しては「紅蓮篇」から既に始まっていた。本来テレビ版では順当に戦っていた「四天王」と呼ばれる敵の幹部クラスが劇場版ではここぞとばかりに一度に攻めて込んでくる。さらに、テレビでは行われなかった四天王ロボットの合体シーンまで追加シーンとして盛り込んでしまった。今石監督は「新作カットは10分あれば良いじゃん」と言っていたのが、30分くらい新作カットを作っちゃって」と述べている。前篇でそうやってしまったので、後篇にあたる「螺旋篇」においての「ラスト」の改編は想像以上のものだった。「テレビ版のファンはこの展開を見てどう思うのだろうか」とい

う一抹の不安さえ思えてしまう程だ。僕は「テ

レビ版」を予習したのだが、その時でも後半の内容の凄さに「お腹いっぱいです」の状態だったのが、その上をいく展開に「もう入りきりません」とすら思えてしまう位の大変化を遂げていた。また中心人物の明確化。これに成功したのは脚本家である中島かずき氏の存在が挙げられる。中島氏は「**「紅蓮篇」**はシモンとカミナの話に絞り込んだ映画だったんです。**「螺旋篇」**もそうしないといけない。だから今回は、シモンとニアの話に絞り込みました」と語っている。映画には、尺という時間的制限もある。その事を中島氏は「TVシリーズの**第3部は群像劇**でしたが、それはTVシリーズならではの**おもしろさ**だろうと、かなり整理しました。」と述べている。以上の二つからも見て分かるように中島氏はTVシリーズで出来る事と劇場版で出来る事の区別をつけたのである。TVシリーズは短いながらも、話数がある分ある程度の融通が利く。しかし劇場版には尺という時間制限が付きまとう。その為TVシリーズで行えた群像劇をあえて削除する事で、物語をスマートにし、その分「ラスト」の変化を劇的にするための手法を選んだのである。結果として対立関係やテーマの明確性をより全面に出す事を可能

にしたのである。

次に「劇場版 交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい」についてである。こちらの手法は「再構成・再構築」の中間作品である。この作品が劇場版になる際、我々ファンにあかされた製作方法は「**既存のフィルムを使いつつも、総集編ではない新しい物語をつくりあげる**」という奇妙な宣言であった。「既存のフィルムを使う」≡「再構成」でありつつ、「新しい物語を作る」≡「再構築」。これらを併せ持ったものが果たして製作可能なのか。この時宣言が出た時の僕には製作スタッフがどのような手法を使っていくのかが不明であった。公開されて映像を見ると、そこには新規カットを含みつつも、既存フィルムの新たな有効利用。そしてそれは実写映像では不可能な「アニメーション」のみが可能とする手法であった。既存の場面をそのまま流用する方法ではなく、音楽用語をここで使うならば、REMIIXした感じである。テレビ版ならば、このシーンの次にはこのような展開があったという場面を全く違う場面で違うシチュエーションで使用してみる。これが事前に宣言されていた「**既存のフィルムを使いつつも、まったく新しい物語をつくる**」というのとはそういう事を暗示していたのである。

また、設定も劇場版のために完全に変化をした。

テレビ版では「地球」に限りなく近い何処かの星という設定であったが、当時公開されたストーリーは「西暦2009年、南極大陸で謎の生命体イマージュが発見された。宇宙より飛来したといわれるイマージュは、地球の侵略を開始。」というように、時代を現代とし、舞台も地球と設定を直した。21世紀という混沌とした今を反映するように、この物語に出てくる主人公レントンをはじめとする多くのキャラも生き延びるために必死に「生きる」という姿が描き出されている。また京田監督はテレビ版とさらに差別化を計るためにテレビ版では多用されてきたサブカルチャー要素をとことん排除した。京田監督は、「振り返ってみると、脚本の作業というのは、いろんなものを切り捨てる作業だったと思います。たとえば、世間一般で『エウレカセブン』の特徴といわれているサブカルチャーに関するネタなんかをほとんど消していって。一つには劇場版ではそんな細かなネタに時間を割く余裕がない、ということもありますが、もう一つは、そこまでやっても『エウレカセブン』は『エウレカセブン』であるのかを試す側面もありました」とパンフレットでも述べられている。この作品の変化には、やはり映画とし

ての尺という問題もあるが、僕が推測するには京田監督の気持ちは、後者の気持ちの方が強かったのではないかと思う。視聴者が一番の特徴は作品の個性と捉えているものを排除してもなおその作品はその作品としての形を維持できるのか。それは一番製作の中で作品の近くにいた人物だからこそ思う率直な気持ちであり、挑戦してみたいと思うものではないのだろうか。

「エウレカセブン」はこの他にも多くの変貌を遂げた。サブカルチャーというリアルなものを排除した上で、テレビ版よりもよりファンタジー色の強い作品にし、ロボットという現実**に強く即した「モノ」**が「話す」（この世界のロボットは生命体が巨大な装甲をまとっているという設定になっている）という非現実を持ち込むことで、作品の設定は我々の住む地球という限りなく現実味があるものでありながら、ロボットが出てきて、そのロボットが話すという所から限りなくファンタジーに傾倒するという非常にリアルとファンタジーが入り混じる作品になった。京田監督自身今回の作品のテーマは「ピーターパン」であると述べている。それが物語にどう影響してくるかは是非作品を見てもらいたい。この作品は、「エウレカセブン」でありながら、テレビ版を見た人ならば、「エウレカ

セブン

セブンだけでなく、違うエウレカセブン」という感想を持つはずである。そして、6月。「再構成・再構築」を正に体现するような作品が登場した。それは、「再構築」という言葉を真っ先に使用した人物、庵野監督率いるスタジオ・カラー（※5）が製作をした「エヴァンゲリオン 新劇場版破 YOU CAN (NOT) ADVANCE」(以下「破」)の公開である。「エヴァンゲリオン」の新劇場版製作が決定した時に出された情報は、「新世紀エヴァンゲリオン」を製作していた時の会社である GAINAX を離れ、新たに庵野監督が作り上げたアニメーションスタジオ「スタジオ・カラー」での製作をするということと映画は4部構成であること。3部と4部が抱き合わせという形で公開されていくことである。その時点ではまだはつきりと今の状態にするかどうか決めていなかったのか変化が訪れるのは3部以降だとしていた。しかし2007年の「序」公開時点で我々は全く異なる展開を見せられた。「序」はテレビ版で言えば「1話から6話」という非常に短い範囲の話であった。だが、見終わっての感想は人物の距離感が全く違うというところと本来ならばこの時点では知らされていない重要なキーワードが既に開示されてい

て、それを全ての人が把握しているという点。更に驚くべきは本来テレビ版では24話に出てくる重要なキーパーソン「渚カヲル」という少年が「序盤」に姿を見せ、「また3番目とはね」というような作品の根幹にあたる部分をほめかし、テロップで「つづく」となった。ここから庵野監督が声明の時に発していた「エヴァは繰り返しの物語」という意味合いが強く提示された。つまりテレビシリーズ及び旧劇場版は新劇場版とは別個の存在ではなく、なんらかの関連があるのではないかとこの憶測が持ち上がるなどファンは翌年公開の第2弾を待ちわびた。しかし2008年に公開予定の第2弾(本作)の公開が2009年にずれ込んだのである。後に雑誌で庵野総監督をして「エヴァを破壊した男」と呼ばれた鶴巻監督のインタビューでそう言った経緯を語っている。それによると『序』が終わった後に、『破』はよりすごいものにしたいたいという思いがあった。それを特に感じたのは『序』終了後に流れた次回予告の評判が一番よかったと聞いた時に庵野総監督自身が「エヴァは変わるべきなんだろうか・」という疑問を持ってから、本来編集編で終わらせる予定だった第2弾が大きな変化を遂げたというのだ。しかし、どうすれば観客の期待に応える作品に

なるだろうという手探り状態の作業と10年前に一度完結させ当時のものがベストであると感じていた総監督含め製作陣の苦悩は相当なものであったと述べられている。満を持して公開された『破』は正に既存の「新世紀エヴァンゲリオン」を完全に「破壊」した作品になった。「エヴァンゲリオン」が評価されたのはただ先鋭的なロボットイメージや、ミステリアスな世界観というだけではない。後半に物語が進むにつれ救いようのないストーリー展開や「陰鬱」で「閉塞的な世界」や「人間の物語」に展開していった事であった。だが、今回の新劇場版は全体を通して**往年のファンだけでなく、ライトなファンにもやさしい作品に仕上げた**。また神話や哲学的なものも以前のように頻繁に出るのではなく、名シーンの焼きまわしという形で盛り込まれている印象がある。その影響と新キャラやエヴァの新機体の登場、過去の特撮を意識したような場面割やオマージュが多く存在している「破」は特にエンターテインメント性を全面に押し出した作品に仕上り、旧劇場版の陰鬱とした作風も消えうせ、自らの意志で闘いに赴いてゆく主人公碇 シンジの姿が描かれた。

そして、12月に公開されたのが「劇場版 マクロスF〜イツワリノウタヒメ〜」である。河

森総監督の一貫した考え方は「**同じ方法や同じことをしたくない**」。これに尽きる。制作発表当初は「総集編」という考え方をしていた河森総監督であったが、「総集編」とは結局既存のフィルムに頼ってしまう癖があり、それは新たな物を作れていないだろうという事でこちらも当初は劇場版の3割を新規カットにする予定がほぼ全部が新規カットに近い状態で行われた。また、「マクロスシリーズ」の伝統である歌に

関しても新たに追加曲を作る形で決して過去の作品にとらわれない新しい作品としての「マクロスF」を河森総監督及び制作陣は作り上げていった。また、先にあげた3作品同様、人物相関も若干の変更を加える事で物語がどのような方向性に導くのかを観客に見せないようにした。結果としてか「マクロスF」は一本の映画として終わると考えられていたのが、2部構成になり今回の劇場版はその前編にあたる。現在の進捗状況としては、「チャットで打ち合わせの段階」であると述べられた。後編を総集編にするならば打ち合わせの必要性はないと感じられるかもしれない。だが、制作陣が決めたのは「マクロスFとして一番収まるべきエンディングを作り上げる」ということであり、**既存のフィルムを使った総集編では終わらない**というこ

とである。後編のタイトルも「サヨナラノツバサ」ということ以外一切内容は不明となっている。

※

「**再構成・再構築**」にかける製作スタッフの思い非常に長くなってしまったが、TVシリーズと劇場版の違いが少しでも分かっていたただけから幸いである。振り返ってみると一つの大きな疑問が生まれる。それはなぜ、「再構成・再構築」なのかという点である。今回の作品は公開されてから一半年月を経たもので10年の歳月が流れている。なぜ、もう一度同じ作品の「再生」をはかろうとしているのだろうか。これは、制作陣の姿勢を見ればわかるのではないだろうか。グレンラガンスタッフからみてとれるのは「テレビシリーズでできなかった事を劇場版だからこそしてみる」というものである。「螺旋篇」を語る際に今石監督と脚本の中島氏が繰り返し言っていたのは「祭りにしたかった」という事だった。自分たちが子供のころに見た「東映アニメ祭り」のようなそんなものをしてみたかったと語っている。テレビにも限界はある。その限界を振り切れるのが劇場版だったからこそ、もう一度「作り直したい」という心が生まれたのではないだろうか。エウレカセブンスター

ツフからは監督が言うように特徴といわれているものを排除した上でなおその作品は作品たるかという純然とした思い、「挑戦」である。それはマクロスFスタッフも同じなのではないだろうか。河森総監督の信念である「同じことはしたくない」という気持ちも結局最終的には過去に自分が作ったものへの挑戦という風にとらえられる。「武器であったものをあえて手放しても作品として成立するか」という思いも「自分が過去に作った作品にあえてもう一度目を向けて制作をしていく」のも過去の自分への挑戦なのである。一度作品につけられたレッテルというものはそう簡単にはぬぐうことはできない。それを受け入れてくれるものもいれば、断固拒否する者も生まれるだろう。そこにあえて挑戦したいという製作スタッフの思いは決して否定はできない。そして、一番その重圧があったのはエヴァンゲリオンスタッフであったのは間違いない。約10年前の異常なエヴァンゲリオンというブームは現在もなお続いており、いまだに多くの新規ファンの獲得に成功している作品のひとつである。庵野総監督の「エヴァは変わらなければいけないのだろうか」という疑問は生まれて当然なのだ。鶴巻監督は「10年前に作った劇場版は終わらせるために作った作品で

あり、実際あの後からエヴァンゲリオンというブームは委縮していくことになる」と述べているところからも、総監督の中でも「10年前」の自分の作品がベストであり、そのベストで終わらせた作品に変化を求めたファンの声は非常に異質に聞こえたことであろう。しかし、現に「エヴァ」は「破」を迎えることで過去を払拭したように思える。だが、鶴巻監督は大きな変化を遂げた「破」ですら、「失敗した」と思っただけで、もつとまぐ物語を運ぶことができず、たはずだと述べている。また鶴巻監督にとつて今回の「破」のパートに含まれるテレビ版でいう第拾九話を使わざるを得なかったのは非常に悔しいと述べている所からもエヴァスタッフの戦いはこれからも続くのだという事が想像できる。

では、スタッフの歩みは今回で止まってしまふのかというところではない。グレンラガンスタッフとエウレカセブンの京田監督はまた何年後かに機会があればもう一度作ってみたいとすら述べている。それは自分がもう少し年をとった時の感性にしたがって作ってみたいというような事であった。また未だに制作を続けているエヴァ、マクロスも歩みを止めてはいない。過去の作品にすぎるわけでもなく、目を背けるわ

けでもない。今自分たちが作り上げる最高のものを作るために制作を続けている。マクロスFの河森総監督は「一番じっくりくる終わり方をスタッフで考えている最中」と述べ、「破」でその世界観を打ち砕いた鶴巻監督は「とりあえずもう頼るべきものは何もないからこそ、やっ」と自由に作れる。庵野監督が何を考えているのかを楽しみだ」と述べ、「破」ではできなかったさらなる「変化」をエヴァンゲリオンに求め「デイズニー映画みたいな明るいエンディングはないかもしれないが、エヴァらしいハッピーエンディングは用意したい」と述べていた。

※

これから「ロボットアニメ」はどこへ向かうのか「再構成・再構築」。それは、制作陣の思いの結晶のようなものではないだろうか。今までの総集編といわれた手法は、作品にはその作品の世界観があるからこそ、その世界観を壊さないように、傷つけないようにして作られたものである。しかし、今回のこのような手法の誕生は、確かに過去に作った自分たちの作品を大事にしているが、それはあくまでも「過去」であり、今の自分たちが作り上げた作品は「同じ」でありながら別個のものとしてとらえる一面があるように思える。特にそれを敏感に感じ取っ

ているのは我々、「見る側」が一番顕著でないだろうか。その作品が好きだからこそ、その作品の続編ができれば嬉しいと思うのは当然の心理だろうしそれがファンであればなおさらではないだろうか。今回、新たに生まれ変わった作品のレビューを見ても、やはり感想は必ずしも

肯定的なものがすべてを占めているわけではない。「劇場版にした事で話が薄くなった気がする」、「昔のあの雰囲気が好きだったのに」、「いっぱい詰め込みすぎていて……」というような意見も聞こえてくる。しかし、考えてみてほしい。語られた物語を再び語りなおす。それがどんなに難しいことであるかを。だからこそ、僕は今回のこの手法を使ったこの4作品はアニメーションの更なる境地へ導く道を作ったのではないかと考えている。そして、制作側の飽くなき挑戦の姿勢なのではないだろうか。過去に作り上げた自分の最高傑作と思える作品に再びメスを入れてはたして今の自分達でどこまでの作品を作り上げることができるのかという飽くなき挑戦なのである。それは作り手の本来の姿なのではないだろうか。在り来たりの今までであるモノで、程々の物を作るのではない。一回、一回のすべてに対し精魂尽き果てるまで作品に向かいあう。そして待っている人達に自分の作

品を送り届ける。今回の「再構成・再構築」は、そんな彼らの姿勢を窺うことができた。そして、もしこの先に日本アニメーションの未来があるというのであれば、それは職人としてのクリエイターが集まった精鋭部隊が生まれるのではないだろうか。

日本アニメーションの更なる進化はまだまだ続く。それを期待してもいいのではないだろうか。